

原 著

外歯瘻の臨床的検討

—特に病悩期間、来院経路および原因歯に関して—

和田重人, 古田 勲

富山医科薬科大学医学部歯科口腔外科学講座

Clinicostatistical analysis on external dental fistula — as for the duration of symptoms, the route of visiting our department and pathogenic teeth —

Shigehito Wada, Isao Furuta

Department of Dentistry and Oral Surgery, Faculty of Medicine, Toyama Medical and
Pharmaceutical University.

Key words: external dental fistula, clinicostatistical analysis, odontogenic infection

Running title: external dental fistula

和文要旨

過去12年6ヶ月間に当科で診断された外歯瘻30例について臨床統計的検討を行い、以下の結果を得た。1) 男女比は1:1であり性差はみられなかった。初診時年齢は11歳から86歳に分布しており、症例全体の平均年齢は47.0歳であった。2) 主訴の大部分が腫瘍形成(40.0%)あるいは排膿(30.0%)であった。病悩期間は、最短7日、最長11年であった。3) 患者は当科を受診する以前に、皮膚科、外科、整形外科、耳鼻咽喉科などの様々な診療科を受診していた。4) 外歯瘻は下顎部に好発しており、原因歯の大部分が下顎(96.7%)に位置していた。5) 治療において、原因歯の大部分(80.0%)が外科的に除去されたが、6症例(20.0%)は根管治療により歯牙が温存された。処置後の経過観察期間は様々(最短3週間、最長2年6ヶ月間)であるが、現在のところ全症例において病変の再燃は認められない。

はじめに

歯瘻は歯に起因する化膿性炎から生じた瘻であり、瘻孔が口腔内の粘膜に開口する内歯瘻と顔面の皮膚に開口する外歯瘻に分類される。外歯瘻は主病巣が顔面の皮膚であることから、外科、整形外科、皮膚科、耳鼻科等の医師により初期治療を施されることも少なくない。なかには原因歯に対する適切な歯科口腔外科的処置の着手が遅れ、長期にわたり排膿や腫脹を繰り返し、患者に必要以上の苦痛を強いる症例も散見される。今回われわれは当科で経験した外歯瘻30例について臨床統計的検討を行い、特に病悩期間、来院経路および原因歯に関する考察を行ったので報告する。

対象および方法

対象は1987年2月から1999年7月までの12年6ヶ月間に当科で取り扱った外歯瘻30例である(写真1)。これらを性、年齢、主訴、病悩期間、来院経路、瘻

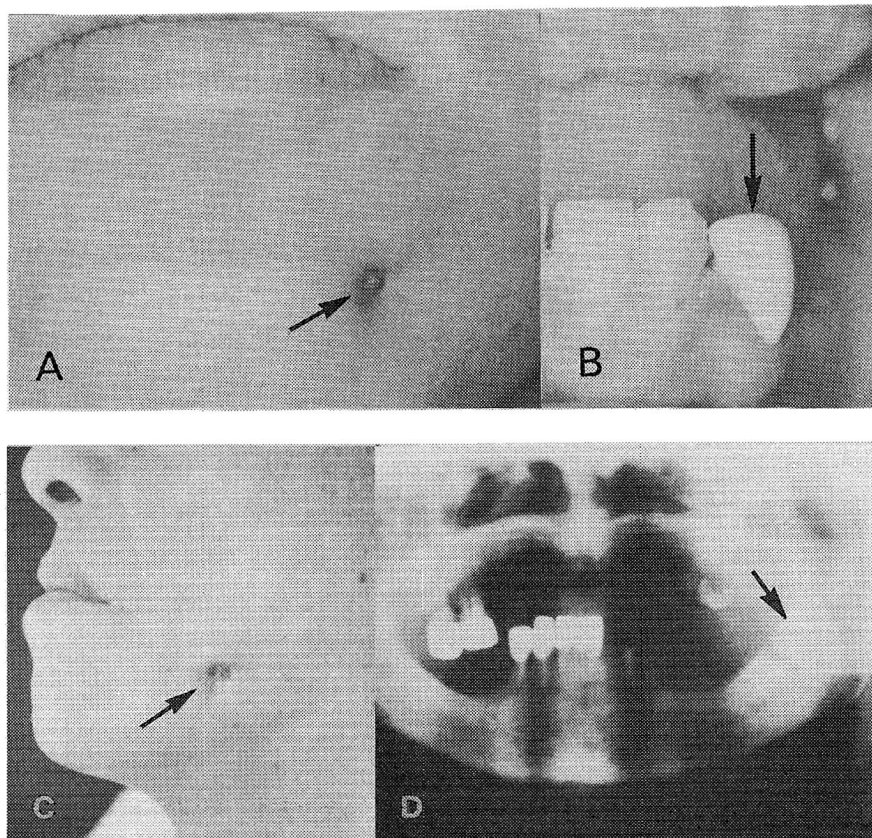


写真 1 外歯瘻の典型例

- 症例 1 A：左側オトガイ部に形成された外歯瘻（→）。
B：同症例の原因歯（→）。根管治療・歯冠修復の既往歴を有する犬歯を認める。
- 症例 2 A：左側下顎部に形成された外歯瘻（→）。
B：同症例の原因歯（→）。埋伏歯周囲の顎骨透過像が認められる。

孔の部位，原因歯，および処置方法について検索を行った。なお，今回の検索では他施設における切開処置の後に瘻孔が生じた症例，すなわち人為的に瘻孔が形成された症例は対象から除外した。

結 果

1) 性および年齢（表 1）

症例全体の性別頻度は，男性15例，女性15例で男女比1：1であり性差は認められなかった。症例は若年層から高齢層にわたり広範囲に分布（最小年齢11歳，最高年齢86歳，平均年齢47.0歳）していた。また，平均年齢は男性症例が47.7歳，女性症例が46.3歳であり，両者に明らかな差は認められなかった。年齢別頻度では，50～59歳が7例（23.3％）と最も多く，次いで30～39歳が6例（20.0％），60～69歳

が5例（16.7％）の順で多かった。

表 1 性および年齢

年 齢	男性	女性	計（％）
10～19		2	2（6.7）
20～29	3	1	4（13.3）
30～39	4	2	6（20.0）
40～49	1	2	3（10.0）
50～59	2	5	7（23.3）
60～69	3	2	5（16.7）
70～79	1		1（3.3）
80～89	1	1	2（6.7）
計	15	15	30（100.0）

外歯瘻の臨床的検討

2) 主訴

主訴別頻度では、腫瘍12例（40.0%）、排膿 9例（30.0%）、腫脹 7例（23.3%）、疼痛 1例（3.3%）、違和感 1例（3.3%）であった。

3) 病悩期間

病悩期間では、1ヶ月未満 4例（13.3%）、1ヶ月から3ヶ月未満13例（43.3%）、3ヶ月から1年未満6例（20.0%）、1年から3年未満5例（16.7%）、3年以上2例（6.7%）、であり、最短7日、最長11年、平均14.6ヶ月であった。

4) 来院経路（表2）

他施設からの紹介により当科を受診した症例（以下、紹介患者症例と略す）は、30例中27例（90.0%）に認められた。患者自身の判断で当科を初診した症例（以下、非紹介患者症例と略す）は、30例中3例（10.0%）に認められた。

紹介患者症例27例中、患者が最初に訪れた診療科は、歯科が11例、皮膚科が6例、外科が4例、整形外科および耳鼻咽喉科が各2例、内科および小児科が各1例であった。また、同27例中当科へ紹介を行った診療科は歯科が15例、皮膚科および整形外科が各3例、外科および耳鼻咽喉科が各2例、内科および小児科が各1例であった。

受診した診療科の延べ数は、歯科19例、皮膚科および外科各6例、耳鼻咽喉科4例、整形外科3例、内科および小児科各1例であった。

表2 来院経路

診療科	最初に訪れた診療科 の例数	当科へ紹介を行った 診療科の例数	受診した診療科 の延べ数
歯 科	11	15	19
皮膚科	6	3	6
外 科	4	2	6
整形外科	2	3	3
耳鼻咽喉科	2	2	4
内 科	1	1	1
小児科	1	1	1
当 科	3	—	—
計	30(100%)	27	40

5) 瘻孔の部位（表3）

瘻孔の部位は下顎部14例（46.7%）、オトガイ部6例（20.0%）、頬部および顎下部が各4例（13.3%）、耳下腺咬筋部および鼻翼基部が各1例（3.3%）であった。また、右側が17例（56.7%）、左側が11例（36.7%）であり、右側にやや多い傾向が認められた。まれと考えられる正中オトガイ部および両側オトガイ部の症例が各1例（3.3%）認められた。

表3 瘻孔の部位

部 位	右	左	正中	両側	計 (%)
下顎部	8	6			14 (46.7)
頰 部	2	2	1	1	6 (20.0)
頰 部	3	1			4 (13.3)
顎下部	2	2			4 (13.3)
耳下腺咬筋部	1				1 (3.3)
鼻翼基部	1				1 (3.3)
計 (%)	17(56.7)	11(36.7)	1(3.3)	1(3.3)	30 (100.0)

6) 原因歯（表4）

上下顎別では、30例29例（96.7%）が下顎歯であり、わずかに1例（3.3%）が上顎歯であった。左右別では右側18例（60.0%）、左側11例（36.7%）、両側1例（3.3%）であり、右側にやや多い傾向が認められた。歯種別では下顎第1大臼歯が14例（46.7%）と最も多く認められ、次いで下顎犬歯が6例（20.0%）、下顎第2大臼歯が4例（13.3%）、下顎第3大臼歯が3例（10.0%）に認められた。

表4 原因歯

	原因歯	右	左	両側	計 (%)
上 顎	犬 歯	1			1 (3.3%)
下 顎	第2乳臼歯		1		1 (3.3%)
	犬 歯	3	2	1	6 (20.0%)
	第2小臼歯	1			1 (3.3%)
	第1大臼歯	9	5		14 (46.7%)
	第2大臼歯	2	2		4 (13.3%)
	第3大臼歯	2	1		3 (10.0%)
	計	18	11	1	30 (100.0%)

7) 処置方法

原因歯に対する処置は、抜歯術単独17例 (56.7%)、抜歯術+嚢胞摘出術 3 例 (10.0%)、根管治療単独 5 例 (16.7%)、根管治療+歯根端切除術 1 例 (3.3%)、その他 4 例 (13.3%) であった。その他の 4 例はいずれも前医により原因歯の抜歯が行われていた症例であり、当科における処置は 3 例が抜歯窩再搔爬術、1 例が腐骨除去術であった。

瘻孔に対する処置は、搔爬術単独14例 (46.7%)、搔爬術+瘻孔閉鎖術 7 例 (23.3%) であった。また、原因歯の抜歯あるいは根管処置により瘻孔が自然閉鎖した無処置例が 9 例 (30.0%) 認められた。

処置後の経過観察期間は様々 (最短 3 週間、最長 2 年 6 ヶ月間) であるが、現在のところ全症例において病変の再燃は認められない。

考 察

外歯瘻は歯に起因する化膿性炎から生じた疾患であるにも拘わらず、外科、整形外科、皮膚科、耳鼻科等の歯科以外の診療科において初期治療を施されることも少なくない。その理由として、病変が顔面の皮膚に出現すること、炎症が慢性に経過するため原因歯の疼痛や歯肉腫脹等の症状が乏しいことが挙げられる。また、排膿、腫瘍、腫脹等の臨床症状は抗生剤の投薬や切開・排膿処置により一時的に消退するが、最終的に歯牙に対する適切な処置がなされない限り、必ず病変の再燃をみる疾患である。

性別では、従来男性に多いと報告されているが¹⁾⁻⁴⁾、女性に多いとする報告⁵⁾ もわずかながら認められた。当科では男女比 1 : 1 と性差は認められなかった。年齢別では、一般に10歳代、20歳代に好発するとされており、その理由として10歳代は下顎第 1 大臼歯の根尖性歯周組織炎の好発時期であること²⁾、20歳代は下顎第 3 大臼歯 (智歯) の歯冠周囲炎の好発時期であること⁶⁾ が指摘されている。当科では10歳代、20歳代での好発傾向は認められず、30 例中16例 (53.3%) が30~50歳代とやや高齢症例が多いことか特徴的であった。主訴は、一般に排膿と腫瘍・腫脹が多いとされており^{1), 3), 5)}、小沢ら⁵⁾ は病変の慢性化・長期化に伴い硬結すなわち腫瘍を主訴とする症例が増加することを指摘している。当

科においては、腫瘍を主訴とする症例は30例中12例 (40.0%) と最も多く、この結果は高齢者症例が多い、すなわち慢性化・長期化した症例が多いという当科における症例の特徴に起因するものと推察された。

病悩期間に関して、朱雀ら⁴⁾ は10日以内の短期間の症例が48例中11例 (22.9%) と多い反面、6 ヶ月以上の長期間の症例も20例 (41.7%) と多く認められたことを報告している。さらに長期間の症例が多く認められる理由として、原因歯に対する根本的な治療が行われずに経過が長期化し、複数の診療科の受診後によりやうく口腔外科を受診する症例が多いことを指摘している。また病悩期間の平均に関して、高谷ら³⁾ は10.1ヶ月、古賀ら¹⁾ は6.2ヶ月であったと報告しており、当科の平均14.6ヶ月はこれらの値と比較して高値であり、慢性化・長期化した症例が多いという当科の症例の特徴を反映しているものと考えられた。また、病悩期間が10年以上のまれな長期症例も報告されているが^{1), 4)}、当科の症例においても病悩期間が11年と極めて長期経過を辿った症例が認められた。

来院経路に関して、一般に患者が外歯瘻を自覚し最初に訪れた診療科は、歯科、外科、皮膚科が多いとされており^{1), 3)-5), 7)}、当科の統計においても30 例中16例 (53.3%) が歯科以外の診療科であり、中でも皮膚科が 6 例 (20.0%)、外科が 4 例 (13.3%) と多かった。また、当科へ紹介を行った診療科では、非紹介患者の 3 例を除く27例中15例 (55.5%) すなわち半数以上が歯科であり、これらの結果は歯科的診断・処置が必須である外歯瘻患者の来院経路における特徴と考えられた。来院以前に受診した診療科の延べ数では、多くの外歯瘻患者は複数の診療科を受診するとされており、1 症例当たりが受診した診療科施設数は平均1.3~1.8ヶ所^{1), 3), 5), 7)} と報告されている。自験例の30症例では、診療科の延べ総数は40ヶ所であり、1 症例当たりが受診した診療科施設数は平均1.3ヶ所とほぼ平均的な値と考えられた。また、個々の症例に関しては、30 例中12 例 (40.0%) が 2 ヶ所以上の診療科を受診した後に当科を受診しており、これも単なる感染症と誤認され診断に苦慮する外歯瘻患者の来院経路の特徴を反映しているものと考えられた。

瘻孔の部位に関して、発生頻度は下顎部・頬部で44.4～79.2%，オトガイ部で6.0～34.9%と報告されており^{1)～4), 7)}，自験例も下顎部・頬部で60.0%，オトガイ部で20.0%とこれらの報告に近似していた。また、朱雀ら⁴⁾は48例中38例（79.2%）が下顎部・頬部における発生であり、そのほとんどが咬筋附着部前縁かつ下顎下縁の約1 cm上方に開口していたとし、下顎臼歯が原因歯である場合にこの傾向が著明となることを指摘している。自験例においても下顎部・頬部症例の瘻孔は咬筋附着部前縁に開口する傾向が認められ、下顎部・頬部症例18例中14例（77.8%）の原因歯が下顎臼歯であった。また、朱雀ら⁴⁾は両側の下顎第1大臼歯に起因したきわめて稀な両側性の外歯瘻を報告している。自験例においても両側犬歯に起因した対称性の両側オトガイ部外歯瘻症例を1例に認め、本発生様式はきわめて稀と考えられた。

一般に外歯瘻の原因歯は、下顎に位置することが多いとされており、その理由として齶蝕を発端とする歯性化膿性炎が下顎に好発することが挙げられる。上顎歯と下顎歯の比率は1：8.3～19.0^{1)～5), 7)}と報告されており、自験例では30例中29例が下顎歯（上下顎歯比1：29.0）でありこの好発傾向はさらに著明であった。なお、上顎歯を原因歯とする症例の瘻孔の開口部位は鼻翼基部であった。原因歯の歯種別では、一般に下顎第1大臼歯が最も多いとされているが^{1), 2), 4), 7), 8)}，下顎犬歯^{3), 5)}が多かったとする報告も少なからず認められる。朱雀ら⁴⁾は下顎第1大臼歯が多い理由として、10歳代における当該歯の齶蝕罹患率が高いこと、高谷ら³⁾は下顎犬歯が多い理由として、犬歯は解剖学的に歯根が長く、高齢時においても脱落することなく化膿性歯髄炎に罹患する機会が多いことを、それぞれ挙げている。自験例においても下顎第1大臼歯を原因歯とする13例の初診時年齢は平均42.1歳であるのに対して、下顎犬歯を原因歯とする6例の初診時年齢は平均55.2歳と高齢であり、前述の理由を支持する結果であった。原因歯に対する処置では、一般的に抜歯術あるいは歯根端切除術等の外科的処置が必要とされることが多く⁸⁾，自験例でも30症例中20例（66.7%）の原因歯を外歯瘻の治療のために抜歯した。また、瘻孔に対する処置に関して、久保ら⁷⁾は原因歯の抜歯と同時

に瘻孔の閉鎖術を施行することを推奨し、その理由として審美性の回復が短期間で得られることを挙げている。また、小沢ら⁵⁾は原因歯に対する処置のみでは皮膚側の陥凹が強く残るという理由から、瘻孔の搔爬術を推奨している。自験例では30症例中21例（70.0%）に瘻孔の搔爬術が、その内7例（23.3%）には瘻孔の閉鎖術が併用されており、これらの処置は臨床経過が長く、皮膚病変の癢痕化が著しい症例や顎骨内の透過性病変の広範な症例に適応されることが多かった。今後は症例数を増やすことにより、機能・審美性を考慮した原因歯および瘻孔に対する治療指針を確立すべきと考えられる。

結 語

今回われわれは、1987年2月から1999年7月までの過去12年6か月間に当科で取り扱った外歯瘻30例について臨床的検討を行い以下の結果を得た。

- 1) 性別では男性15例，女15例であった。年齢は若年層から高齢層にわたり広範囲に分布（最小年齢11歳，最高年齢86歳，平均年齢47.0歳）していた。
- 2) 病悩期間は，最短7日，最長11年，平均14.6ヶ月であった。
- 3) 患者が最初に訪れた診療科は，紹介患者症例27例中歯科が11例，医科が16例（皮膚科：6例，外科：4例，整形外科：2例，耳鼻咽喉科：2例，内科：1例，小児科：1例）であった。30例中12例（40.0%）が，2ヶ所以上の診療科を受診した後に当科を受診していた。
- 4) 瘻孔の部位では，下顎部が14例（46.7%），オトガイ部が6例（20.0%）と多く，原因歯の大部分が下顎（96.7%）に位置していた。
- 5) 治療に関して，30例中24例（80.0%）では原因歯が外科的に除去されたが，6症例（20.0%）では根管治療により歯牙の温存が可能であった。

引用文献

- 1) 古賀千尋，小林吉史，山鹿 憲，他：外歯瘻106例の臨床統計的観察。日口科誌 40：313－320，1991。
- 2) 岡 光夫，奥田達也，勝見洋子，他：外歯瘻の

臨床的観察。日口外誌 11: 85-87, 1965。

- 3) 高谷康男, 西嶋克巳, 長畠駿一郎, 他: 最近10年間の当教室における外歯瘻に関する臨床統計的観察。日口科誌 32: 448-453, 1983。
- 4) 朱雀直道, 亀山忠光, 安倍侑子, 他: 外歯瘻。日口外誌 16: 376-380, 1970。
- 5) 小沢一喜, 又賀 泉, 土川幸三, 他: 外歯瘻の臨床的検討。日口外誌 35: 1569-1574, 1989。
- 6) 石 泰三: 外歯瘻の分類およびその整形手術法。臨床歯科 240: 20-4 1963。
- 7) 久保孝市, 池田 敦, 佐々木雅彦, 他: 外歯瘻102例の臨床統計的検討。日口外誌 43: 45-47, 1989。
- 8) 塩田 覚: 外歯瘻。内田安信監修; 顎口腔外科診断治療体系。第1版, 講談社, 東京, 628-629, 1991。

Abstract

Thirty cases of external dental fistula diagnosed in our clinic during the past 12 years and 6 months were clinicostatistically studied. Results obtained were as follows;

- 1) The ratio males to females was 1:1. The age at first visit ranged from 11 to 86 years, with a mean age of 47.0 years.
- 2) Most of the chief complains were mass formations (40.0%) or pus discharges (30.0%). The duration of symptoms ranged from 7 days to 11 years.
- 3) Patients had taken medical advice at many other departments, such as dermatology, surgery, orthopedic surgery, or otorhinolaryngology, before visiting our clinic.
- 4) A most frequent site of external dental fistula was the mandibular region. Most of the pathogenic teeth were observed in the mandible (96.7%).
- 5) As for the treatment, most of pathogenic teeth (80.0%) were surgically removed, but six cases (20.0%) were cured only by root canal therapy.